

門 13
號 2025
卷 /



妙

戲談

題詞

天長地濶世間豐
三都文人評判遍
天能使人言人穴
何用重著作者考

書畫儒者到處充

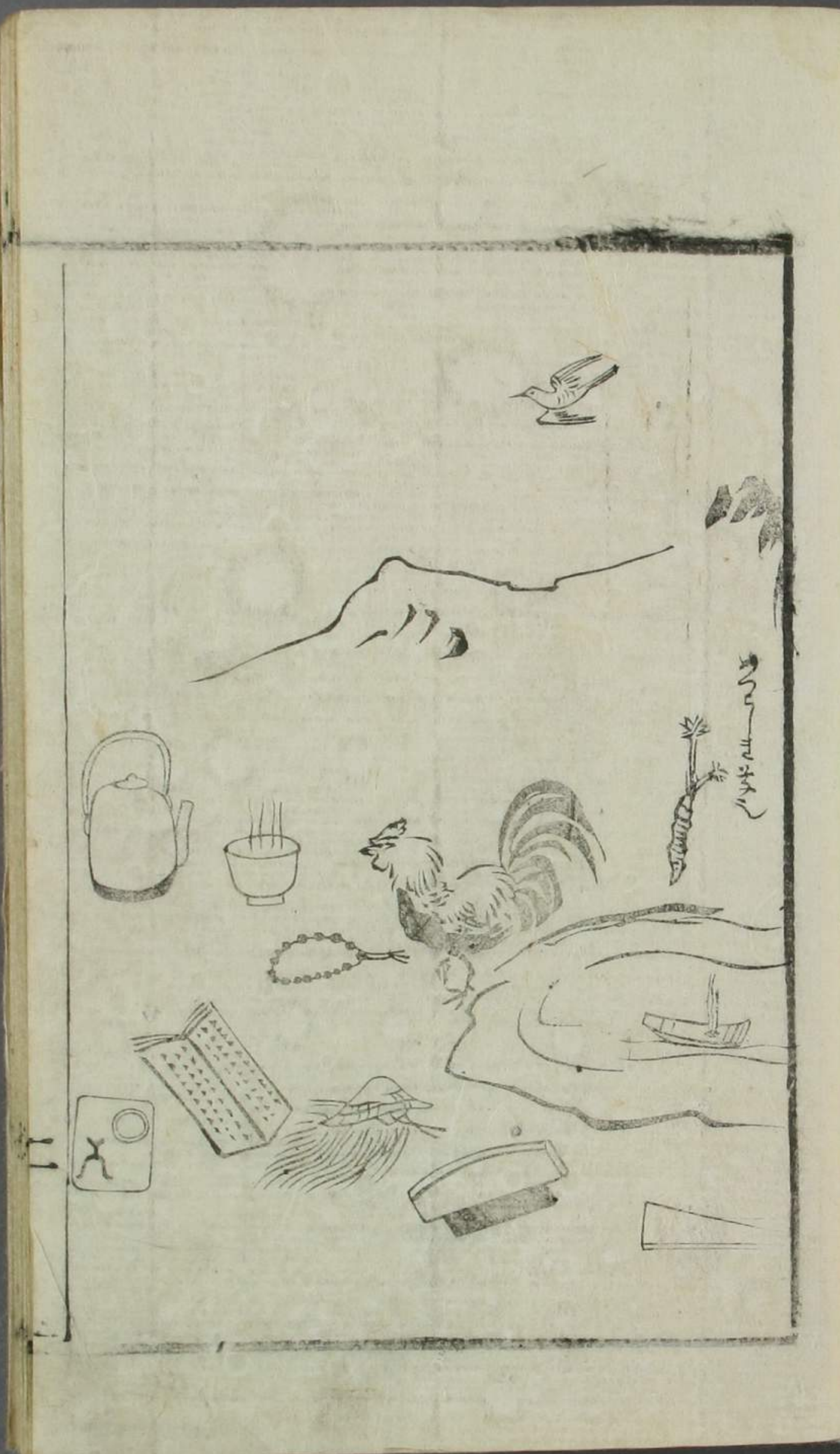
說得奇也一篇中

讀者解頤聞者同

抑揚自是造化功

方外山人撰





前篇目録

天帝論現世

昔賢會冥府

膳庵說先哲

菱胡誥山亥

華三議琴大

後篇五回相次

具翻戲圖有詩為證

孤彈新調

楨搯鏡口

隱然微妙

七流一賢

妙々戲談上

平氣亭先生著

出放大

門人

編次

樗々良

第一回

天帝論現世

太平三百年の有難き士民共酒を

吞之肉を食ひ花お看月り嘯し腹鼓
を鳴し歡呼する甘露の膏沢ふ飽キ
文章も大平を潤色するの道具なり
詩賦八時の盛衰を鳴らす鼓吹之遠
境假邑三戸乃民も韻を踏平仄を並
る様より遊歴此文人も各當も互
む草鞋をうけ筆を舐めく口を糊を
実の世も様々の營みなり近頃も春

秋の分ちもあつく晝画發會を催し或
も看連又も消暑の展覧の新居發令
のとて扇面亭より引たる清風二帖
へ散しお狹し社中ハ勿論一面半識
主も配り付都下乃士商を集免白銀
一粒より二朱一分夫より上り別席
を設け糟臭き酒は一匁の肴札茂出
し日暮ふるれハ拂ふがみく追出し

跡も座敷や膳部の勘定差別残さる
着服一會を免ハ行路の人と同様
筵に列る先生も卑利を談しき蓋
知らぬ頃も又田舎漢を勸メ在郷
と書畫會を催しとり甚しき凶園
の社も入其沢を仰ふ族も有よと嘆
む可あり或一先生は春以せ崎辺へ
遊歴し一文人の許へ尋らぬし小

此文人入きをしく云近頃都下の文
人達甚の悪評あり足下も定て其行
あるへし丸様の穢きある者も此と
ハリ中々と云れて先生大に當惑し
て其ハ誠実の字へ有何某先生の門
人にして即爰に送別の詩文何と聖
人禮を制しあるも尊卑の分を正し
國ニ制度有り以らんぞ利の爲と名

を敗り師を汚さんと様々入訳り
て一泊を乞得ととと夢了加永乃今
日りに至り我道既は地は墜たりと當
今世亦在を正人君子一大浩嘆お發
をるのみ々らる往年世を去るは
入奇伯石南角泰代暗才より近
栗三其園姻是北三錦成膳庵多冥府
尔在でつらく婆娑の有様残えられ

手を額小あゝ笑止千万なるや嘆息
あり去步は先生方はもと浩量
大氣の人々るれる見ぬ振るる打過
られし小或日天帝勅を下しと仰ら
るる扱々文人は怨の深きもの
なる井戸辺に居する文盲山人
と呼ぶ者あり年々歳々番附を著
をて數限りもる小最初此内ハ文人

水滸傳文人評判記の或も名流品藻
又も藝苑名家競の和漢各体歌鑑の
又ハ名物流行鏡杯を綴り文人より
一朱二朱ツ貪り一が其むん附一載
らま一又人達も面中々澀々一なる
已か名を賣る梯子やと遂懐中より
ひぬり出しやれり戴る文盲三人夫
かしく考頁壽命附と標題せる今

不思議の番附を拵へて先頃世を
去し半千ヤ又ニ快庵等り携來て云
我ら娑婆に在り時既ニ天帝ハ八九
百年の壽命を授るゝとして二朱一
朱ツ文盲山人小贈一甲斐となく
十が一あもふらそしてをや間公の
帳小附一ハ寛ならむや飯一玉ひと
泣付きらるハ困一果あるるあり

彭祖の八百竹の内か三る六十るん
ども冥府計算用違之抑人間の生命
ハ生前已に定數あり天帝と云凡私
り増減成可くは昔少君か漢乃武
帝を仙人ふしくやらんと欺く多免
志も有甚生前みはく僅南一位の礼
金にて八九百年の壽命を授るとも
前代未定和漢ハ勿論アフリカ亞墨

利加ふも未定及の珍るに頃又文
人魚尽と云番附あり以り射利賣
名の徒るれをとく万物の灵と生き
るる有る譬られて嬉ふ若もあり又
文人花の顔見せとて文人を河原者
よ見立られく羞せす是等の下か
増長しく凶園の黨よ以る族も有る
と一扱々嘆かるときとありと仰有

ききり栗三先生お始免諸先生達謹
んては文盲山人と申者ハ仰の如く
其慾の深きも澎湖海よりも深く
歐羅巴の牙而白山よりも高く昏画
会の世話役文人の畱荒一琴大杯と
同店よて爪の長おと計知へるは
あゝ青軒杯といふ才子も早く其機
我尼て入口小書畫會出席一切後と

ハリヤと云札を出せりさまも法文
盲山人も儒者も非を昏画小非む
く文苑小先生と呼ま著も懸らぬ
者なれハ夫が当時大家乃負をな
名をうり利ニのみ奔るの徒を戒
し免有ふトとハれたる

第二回

昔賢會冥府

前ニ云天帝勅を下シク當世の諸先生達賣名射利を多クシ學業の衰るを嗟嘆志ありハカク斯てハ捨置り多シと粟三先生を始免諸先生達一日冥府孔廳堂ニ相合集せり儒ニ次て技藝を以て往年也尔名あり一而々書家尔多菱胡克明龍沢敬義畫ニ文趙華三金陵曲可南胡等各々傳

へて云我々か藝ハ小道と以て凡古來授受の法則あり今也ニある逸才雲工拙城龍民文隣陵古永海一我水虎陵雲杯各門戸を張り一家をなす其内又も其人の法を守らば時好小媚ひ我々が支流餘裔お汲みぐら師の面を汚る者も有り尤らも諸先生達の妙論高説を穿て世ニ在る人の為

不可否を弁せんと各廳堂小ふり
れハはるを聞傳て數万の群灵階下
り集り見物を時よ正面見えを大手
筆に一聯の長篇を題せり

弁平右文大都會

豪傑輩出鳴明時

王李脩辭世共飽

朱明七子人已遺

陸范平坦稱時好

王袁總當嬉新奇

錦成振斫九經談

北三揭旗勤王師

妙々奇談蝸牛戰

一枚番附噪一時

物換星移人已逝

學問文章共世衰

仙岳古碑捨沙上
詩聖堂像附賈兒
請看當今噪名徒
三亥生殘厚慙皮
半切唐紙尚論價
浪華少竹亦做之
海屋畫手高於儒
搜陰貫禮繁昌記

星岸振頭東都去
雲三貧病不可醫
琴大計利自造禍
鼎才汚名氣奚沮
魯屋磊落能使酒
枕三吟壇自撐毫
胡山避交暗計利
艇才何久禁酒危

青軒百詠似說法
確矣海算人解頤
樗苑著書論時事
素水說兵名空馳
椿念武青已老矣
椿三山手獨舉旗
詩三弄文刪經文
梅奚我湖互相推

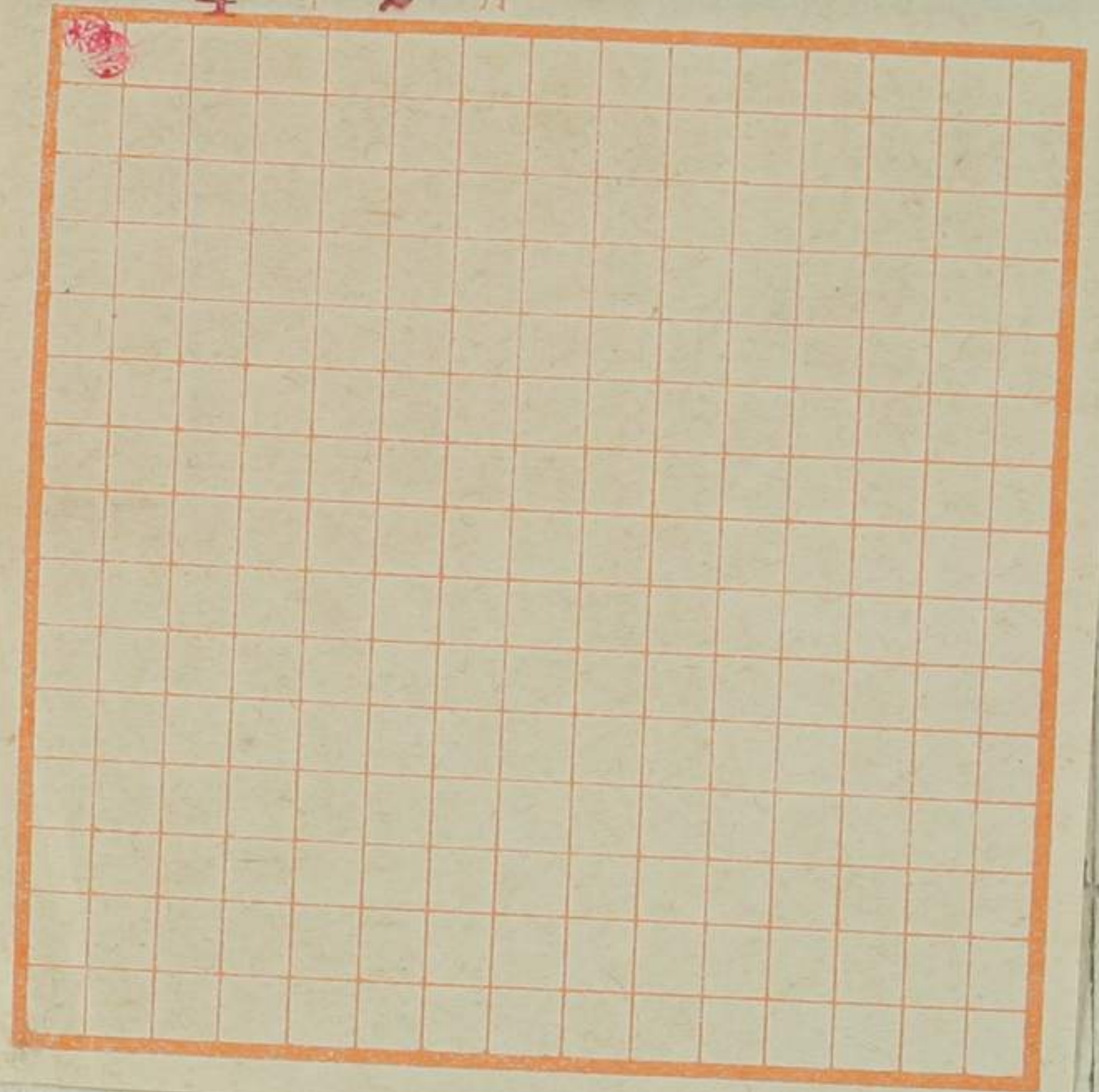
銀奚番附甚多私
今春展覽有故延
旁觀議論已多岐
寄語當世諸先生
玻璃鏡中何得欺
自是造物有安排
一篇公論堪嘆嗟
弟子曰妙々奇談の一篇出く又後夜

の夢作者考の作有り義士の碑の論
杯ハある程錦成の活眼小非を
と玉王か多し予師平氣亭老先生深
く時々の弊を激論あり射利の徒を
悪まると切あり此春先生小従と上
毛小遊し友人厚田の樗苑か義士
賛詞一本を贈きり先生戯り妙々奇
談は倣ふく其序文を評せられしは

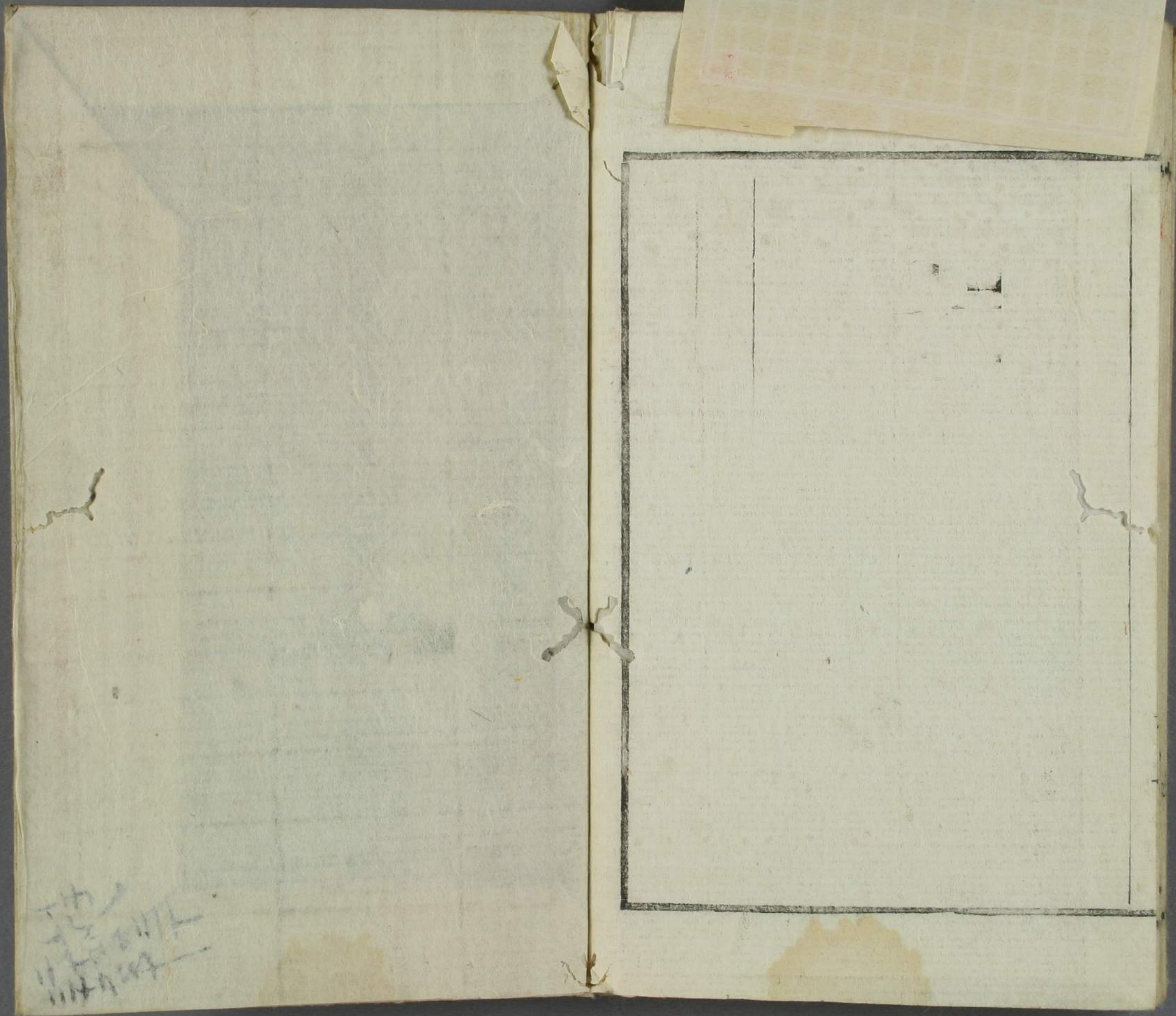
忽四方は傳へ見る人奇の又奇とを
予等私にお計く其半を梓し二卷
とを若文説非ららハ都下の君子筆
をおしまた教る事何れと云

足利 泡幻記

4 年 2 月



Handwritten text in the bottom-left corner of the left page, possibly a date or signature, including characters like '11月' and '11月'.



Handwritten text in the bottom left corner of the left page, possibly including the number '11' and some illegible characters.



